荒野の羊飼い

アン・N・クラーク 作
山崎勉 訳

心の児童文学館

荒野の羊飼い

アン・N・クラーク著
山崎 勉(やまざき つとむ)訳
ぬぷん児童図書出版 1980
P.336/A5判（心の児童文学館シリーズ 8）
小学生上級以上～ 中学生
Ann Nolan Clark
Year Walk

心の児童文学館シリーズ 8
■荒野の羊飼い■ 定価1,400円

1980年10月1日 第1刷発行
1988年12月5日 第7刷発行
(C)
訳 者 山崎 勉
発行者 石井 満
発行所 〒232 横浜市南区永田東2丁目26-14
株式会社 ぬぷん児童図書出版
電話 (045) 741-0743 振替横浜9-15196
印刷所 明和印刷株式会社
製本所 難波製本
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

6602

ISBN 4-88975-108-4 ¥1400E

荒野の羊飼い

アン・N・クラーク 作
山崎勉 訳

若い友人の
バーナード・フランシス・シルバーマンに

表紙・装丁・さしえ　石原優子

YEAR WALK by Ann Nolan Clark
PUBLISHED BY The Viking Press, Inc.
COPYRIGHT © 1975 by Ann Nolan Clark
Japanese translation rights arranged with
The Viking Press
through Tuttle-Mori Agency, Inc, Tokyo

読者へ

わたしは、少女だったころ、父といっしょに――ずっとあとになってからは息子といっしょに――ニューメキシコ州の放牧地や、山のふもとの丘陵地帯をドライブしたものでした。そのとき、きまって、さびしい野営地や、たき火や、テントや、羊飼いのほろ馬車や、足かせをかけられたラバや、羊の群れの番をしている犬や、ときには遠くに見える、羊飼いの姿に、とても強く心をひかれました。羊飼いといえば、近くまでは来ても、わたしたちが車を走らせている深いわだちのついた砂だらけの道のすぐそばまではけっして来ませんでした。

わたしの父の話では、その人たちはバスク人の羊飼いで、カウボーイたちといつもいがみあっているということでした。というのも、カウボーイたちの牛の群れもバスク人の放牧地の草をはみ、とぼしい泉や水たまりの水を飲んでいたからです。牛の群れはいつもかけていました。カウボーイたちはよく仕込まれた馬にまたがって全速力で疾走していましたが、羊飼いたちは、羊や荷物運搬用のラバや犬を連れて歩いていました。わたしはそのころすでに、このような羊飼いの物語を書いてみたいと思いました。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

それはもうずいぶん前のことです。一つの物語が生まれるまでに、かなりの年月が流れ、そのあいだに、わたしは何冊もの本を書きました。

とうとう四年前、わたしは友人と二人で、いまお話した羊飼いたちの出身地であるスペイン領バスク地方を一目見るために、スペインへ渡りました。それでもなお、このバスク人の物語を書きあげる前に、一冊のアイルランドに関する本が割りこんできたりしたのでした。二年前のことです、機が熟したのは。今度こそバスク人の本を書こう。そう思ったわたしは、別の友人といっしょにスペインへ行きました。アメリカにやってきたバスク人の故郷と、そこに住む人びとのことをじかに知るためにです。アメリカにいたとき、わたしたちはこんなふうに聞かされていました。「バスク人はよそものは受けつけない。バスク人を理解することはできないだろう。」と。ですが、スペインのバスク人はとても親切な人たちでした。わたしたちが行きたいと思うところへは、どこへでも連れていってくれました。見たいものは何でも見せてくれました。知る必要のあることは、みんな教えてくれました。わたしはスペインのピレネー山脈のバスク地方の古い家に住むバスク人の一家を訪ねましたが、そのときのことをけっして忘れないでしょう。その家は、この物語の主人公のケパがやがて住むことになるはずの家とそっくりでした。

帰国するとふたたび、必要な読書にとりかかりました。バスク人に関する書物がなぜこうも少ないのか、わたしにはわかりません。わたしにいわせれば、バスク人は古代ローマより古い歴史と、ヨーロッ

パでもっとも古い言語を持った魅力あふれる種族なのです。ですが、図書館に勤めるわたしの友人たちが、わたしを助けてくれました。ユタ州のバージニア・ハンソン、アリゾナ州、ツーソンにあるアリゾナ大学図書館のルーティ・ヒグビーです。ネバダ州、ラスベガスの大学図書館や国会図書館も、バスク人の歴史、伝統、文化、言語に関する、これまで刊行された、あるいはまだ刊行されていない、いろんな論文を見つけてくれました。英語で書かれた、あるいは英語に翻訳されたバスク人に関する本も少しはありました。

ユタ州のカーナ・マクダウェルと、ラスベガス大学のロバート・ラクソールトは、二人のお父さんたちが、その昔、ユタ州やネバダ州で牧夫として働いていたころの経験を話してくれました。ボイド・ソーヤーの『ネバダの遊牧民』という本はとても役にたちました。読書に一年ついやしたあと、わたしはいよいよアイダホ州に行くことにしました。そこはわたしが羊飼いの国として描こうとえらんでおいたところです。

このときには、アイダホ州、ボイシのドロシー・アルデコーアと、バジル・アルデコーア、それにカーメン・レトクやジョー・レトクといった人たちが、このうえなく協力してくれました。この人たちは、自分たちの牧場にわたしを連れていって、羊が子を生むところや毛を刈られるところを見せてくれました。そして、その年ももっとあとになってから、バスク人の羊飼いたちや、その羊飼いたちが連れてい

る犬や、ラバや、羊たちに出あうことができたのでした。

わたしはアイダホ州のビッグスモーキーという山のことは知りませんが、ニューメキシコ州やコロラド州の山岳地帯、それにユタ州の山のふもとの丘陵地帯については、スペイン人のことばをかりれば、〈自分の手のひら〉のようによく知っています。近くのアイダホ州営林事務所の人たちが、わたしの出すどんな質問にも答えてくれました。

わたしがこの本を書きはじめたのは、その後二年たってからでしたが、書きはじめるとすらすら書けて、本が完成しました。

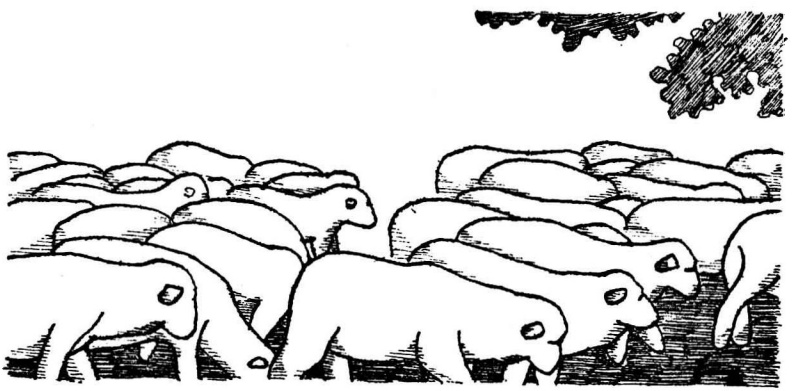
ニューメキシコ、ユタ、ネバダ、それにアイダホといった州には、バスク人の歴史、伝統、夢のかけらがいくつも残っていて、それらがこの本の内容を豊かにしてくれました。わたしは、この本を読んだアメリカ系バスク人の若い人たちが、自分たちの先祖が道のないところに道をつくって進み、荒野を牧場にし、放牧地に定住して、アメリカ南西部の開拓に大きな役割をはたしたということを思い出していただけたらと願っています。

アン・ノーラン・クラーク

もくじ

一章　故郷をあとに……13
1　一通の手紙……14
2　家族会議……25
3　母の反対……34
4　スペイン軍か、アメリカか……42
5　銃と犬と……50
6　ピレネーの歌……62
二章　旅のはじまり……75
7　ティオ・マルコとパト・カク……76
8　ティンカの首輪……84

9 一条の煙……93
10 ティオ・マルコの悲しみ……100
11 ついに一人……112
三章 起伏する山なみ……119
12 ガラガラヘビ……120
13 オムレツと手紙と…136
14 きちがいハンス……145
15 秘密の牧場……156
16 コヨーテの襲撃……171

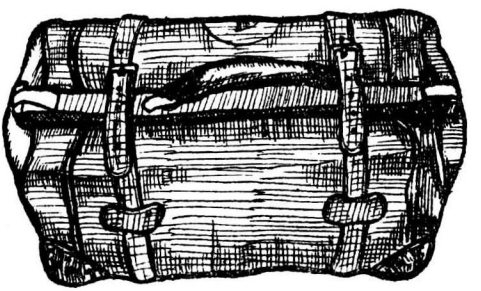


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

四章　荒野……189
17　響きわたるこだま……190
18　シカとアメリカライオン……199
19　落雷……213
20　ふしぎな幸運……221
21　洪水……228
22　秋のおとずれ……242
23　クリスの口実……249
24　クマと滝つぼ……257

五章　旅の終わり……271
25　カレンダーの贈り物……272
26　パト・カクの知恵……278
27　十七歳の誕生日……286
28　生まれるもの、死にゆくもの……300
29　吹雪……308
30　小箱のなかの金色の夢……319
訳者あとがき……328
表紙・装丁・さしえ　石原優子

一章　故郷(きょう)をあとに



1 一通の手紙

ボイシだ！　とケパは思った。アメリカの、アイダホ州の、ボイシに来たのだ！　ケパは旅行かばんと、ギターと、羊飼いのつえを大事そうにかかえて、汽車の高いふみ段からとびおりた。

機関車が汽笛を鳴らし、やかましい音をたてて蒸気をはいた。汽車はかたんと動いて、レールを滑りはじめた。開かれた客車の窓をうめつくす顔、顔、顔。みんなが手を振って、さようならといっていた。プラットホームに立っているケパに向かって、口ぐちに別れのことばを叫んでいた。だがケパにわかったのは、そのなかの一人がいったことばだけだった。バスク語でこういっていた。「自動車の運転を覚えたら、日曜日ごとに会いにやってくるよ、ケパ。」その声の主はケパの友人のアレハンドロで、アレハンドロもまた、スペインのバスク地方のピレネー山脈のなかにある同じ故郷の村からやってきたのだ

った。

この二人の少年はいっしょに村を出て、大西洋の荒波とアメリカの荒野をともに渡ってきたのだが、いよいよ別れのときがきたのだ。別れるつもりはなかったのだが、アレハンドロの切符には「カリフォルニア」と書いてあった。ケパは、遠ざかる汽車をじっと見ていた。さっきのアレハンドロの声が耳のなかで鳴りつづけていた。ケパはその声に答えなかった。何といったらいいのかわからなかったのだ。友だちは行ってしまった。

ケパはきゅっと胸がしめつけられるようなホームシックに襲われた。はじめて来た見なれない土地の、ほとんど何もない駅のプラットホームに立っているケパの目の前に、スペインの故郷の村が、まるで目の前にあるかのようにあらわれた。ケパはふたたび二つの家族——父の家族と一番めの隣人の家族——の家のあいだを流れている、岩だらけの、せまい渓流を見た。谷をとり囲む山やまの起伏と、そびえ立つピレネー山脈の頂が見えた。山の木ぎ——ブナ、クリ、オーク——が、渓流にへだてられた向かいのトウモロコシ畑のへりのところまでせまっていた。ブドウ畑がトウモロコシ畑と牧草地のあいだに広がっていた。牧草地には、刈ったシダの山や、草におおわれたたけの高い干し草用の棒が点てんと散らばっていて、それが雨よけの帽子をかぶっているところは、背の高い、ぶかっこうな巨人のようにみえた。三階建ての白いしっくいをぬった石造りの家が二軒、また目の前に浮かんできた。その二軒の家は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com